

高懸雄治教授退職記念号発刊に寄せて

経済学部長 平 澤 亨 輔

高懸雄治先生の定年によるご退職に際し、札幌学院大学総合研究所経済研究部会は紀要「札幌学院大学経済論集」の記念号を発刊し、ここに贈呈いたします。

高懸先生は、2009年3月に定年により札幌学院大学を退職されました。高懸先生は1941年に北海道南幌町でお生まれになり、1967年に法政大学経済学部を卒業後、修士課程を法政大学社会科学部研究科、博士課程を國學院大學経済学研究科で修められ、1997年に國學院大學で経済学博士号を取得されています。1971年から銀行研究会に勤務され、1978年に旭川大学経済学部専任講師、1986年に同大学教授になられた後、1998年に本学経済学部へ赴任されました。本学では、「国際金融論」、「発展途上国経済論」などを担当されています。本学では11年にわたって教鞭をとられましたが、それ以前から本学で非常勤講師を長く勤められ、本学の学生の教育に大きく貢献されています。2006年に学科長を務められるなど行政面においても多大の貢献をされています。

先生の専門分野は国際金融論であり、研究論文では、スタグフレーション、アメリカの債務国への転落、途上国の債務危機と日本との関係などいろいろな側面にわたって研究をされておられます。その研究の集約の一つが1995年に上梓された「ドル体制とNAFTA」です。この著書ではドル体制の構図の変化が日米経済、途上国の対外債務問題等を通じてどのように現れるか、またNAFTAがその中でどのような位置づけを与えられるかを分析しておられ、高懸先生の研究者として積み重ねられた努力の成果が現れた著作といえます。

高懸先生とお話しすると大変興味深い独自の観点からお話をされます。またその話には情熱がこもっており、学生の講義においてもそのような情熱を持ったお話をされたのではないかと推測されます。その一端が高懸先生の最終講義によく現れているように思いました。先生は、その講義でチェ・ゲバラとオードリー・ヘップバーンの生涯を取り上げられました。貧困にあえぐ人民のために革命を志向したゲバラとユニチーフ大使として発展途上国の人々のために世界各国を回ったヘップバーンに対する畏敬の念と思い入れがその講義にあふれており、先生のお人柄が現れていました。このような先生が本学の学生の教育に当たられたことは大変誇りに思えることです。こうした経緯もあり、今回、とくに高懸先生にお願いして本記念号に、その最終講義を活字の形で収めていただきました。先生のご厚意に感謝申し上げます。

先生がこのような情熱をもって今後も御健勝で研究を進められることを祈り、粗辞ながら謹呈の言葉とさせていただきます。